

ルターにおける義認思想の研究

宗教改革的転回点の解明を中心として

立教大学大学院博士課程後期
田 所 康

まえがき

本研究は、ルターがその生涯の如何なる時点において、如何なる内容をもって、いわゆる「宗教改革的転回」を経験したかという問題を追求する中からルターにおける義認思想の研究を行うものである。

一、従来行われたルターの宗教改革的転回に関する研究

二十世紀初頭以降、ルターの宗教改革的転回に関する研究結果が数多く発表されている。その一端を挙げれば末尾の別表のようになる。

これらの研究結果を大略的に分類すれば、フォーゲルザンクらによって代表される一五二三―一五年のいわゆる早期説と、E・ピツアーらによって代表される一五一八年の後期説とに分けられよう。二十世紀中葉以降においては、単にルターの宗教改革的転回の時期を模索するのみならず、ルターが到達していた神学的な立場までも厳密に論じようとする傾向が現れてきて、その結果、後期説に傾く傾向が現れてきているように見える。従って本論文においては極めて単純にルターが果たして何時の時点で唯名論に根ざす、新しい道・*via modernae*を基本とした能動的な義の考え方から、神の愛にもとづく受動的な義への転回を経験したかという一点に絞ってその転回点を解明したいと考えている。

二、ルター著作の分析

(一) 『第一回詩篇講義』(一五二三年八月一六日午前六時―一五二五年一〇月二二日の七九七日間)

- a. 詩篇 五・八(九)グロッセ「主よ、私の敵対者ら(即ち彼らの期待に反してわたしが幸福になることを彼らが見て、彼らが逃亡するため、また混乱したりするために)のゆえに、あなたの義(それはわたしの信仰から出るのであるが)のうちにある私(つまり私の仲間のうちの)をお導きください。あなたの前にある私の道(即ち、人々の目の前において偽善者として歩むのではなくて、真理においてまたあなたがもあなたの目の前において歩む)を真直ぐにして下さい」

この時期はルターが一五二二年一〇月に神学博士となって、ヴィッテンベルク大学で聖書学を講じ始めて間もない頃であり、ひたむきな努力を積み重ねていれば、神は必ず自分を義とされるはずであるという気概を持っ

て努力を重ねていたと考えられる。すなわち、この時期ルターはなお、新しい道⁽¹⁾の考え方の上に立つて、自らの最善を尽くして神の前に義とされることを追求し、神の導きを祈り求め続けていたのである。ルターは以前、「神の義」とは復讐する神の怒りであると考えて、ローマ一・一六、一七の「福音には神の義が啓示されている」という聖句を読んだとき心の底から「神の義」という語を憎んだのであった。⁽²⁾しかし一五一九年の『第二回詩篇講義』のこの聖句についての解説の中では「神の義」について以下のように述べている。

「以下においてわれわれがしばしば問題にするであろう『神の義』を、真に聖書的な意味で理解することにわれわれは習熟しなければならない。その『神の義』は、最も一般的に理解されるような、『その義によって神自らが義であり』、『その義によって不敬虔な者を断罪する』ものではなく、聖アウグスティヌスが『霊と文字について』で『神が人間を義とする時に人間に着せる義である』と述べているような、義とする憐れみ、或いは恩恵そのものであり、それによってわれわれが神の前に義とみなされるものである。神の義について使徒はローマ一・一七で『神の義は福音の中に啓示されている。信仰による義人は生きると書かれているとおりである』と述べ、またローマ・三(二一)で『しかし今や、神の義が律法とは別に、しかも律法と預言者によって証しされて現わされた』と述べている⁽³⁾」

すなわちここでは、「神の義」について完全に宗教改革的認識に達していることを示している。もし一五二三年の時点でローマ一・一七の聖句について第二回講義のときと同じような考え方を持っていたならば、これほど重要な事柄に付いて第一回講義のスコリエの中で何も述べないはずはない。従って詩五・八(九)に関する第一回講義の段階(一五二三年九月下旬)⁽⁴⁾では、キリストの救いによる義認を認識していたとは考えられず、この『第一回講義』のグロッセの中に神の恵みを伴う「正義」についての思想は含まれていない⁽⁵⁾と思われる。

b. 詩篇三〇(三二)・一(二)「グロッセ、あなた(つまり苦難の中に見捨てられている方である)の下にのみ、主よわたしは(不信仰なもののように)永遠に惑わされる事のないように(しかしこの苦しみの時に支えてくださるように)希望しました。あなたの(なぜならあなたは審判者であり、何故ならあなたは人間の義に従って私を正当に十字架につけられたものと見なすから)正義のうちにわたしを逃れさせてください」⁽⁶⁾

ヒルシュはこのグロッセを引用して、「ルターは善なる神への罪が我々を絶望させるようにこの詩篇を取り上げている。その中では、神の善は神の怒りを念頭に思い浮かべせる。ここからは神の義の新しい説明というようなものは何ものも感知させない。『あなたの正義によって私を逃れさせてください』と言う聖句に対して、彼はグロッセの中で、『何故なら義なる審判者だからです』と述べているのである。つまりこのグロッセは罪なく迫害されたキリストについての説明を与えているのである」⁽⁷⁾と書いている。即ち、このグロッセにおいてルターは怒りの神に対する恐れあまりに、正義の神よ何とか人間を赦したまえとの切実な祈りを表現したものと考えられる。従ってこの祈りでは、キリストの十字架と同じように、自分が十字架につけられることの恐ろしさのみを考えて神の救いを祈っている姿をあらわしたものであろう。

c. 詩篇三一(三二)・一 スコリエ「誰も自分自身だけで救われる事はなく、キリストを通してだけ救われるのである。そしてこのことはその手紙に見入る誰にとっても明らかであるように、その手紙の殆どすべての言葉が語りかけるロマ人への祝福されたパウロの全書簡が論ずるところなのである。何故なら、パウロは(ローマ一・一八、一七)『神の怒りは天から現わされる』また『神の義が啓示される』などと言っているからである。この意味はこうである：どんな人間も神の怒りがあらゆる人間の上であり、また神

の前にすべての人々は罪の中にあるということを知らない。しかし、キリストの福音を通してキリストは天から如何に我々がその怒りから救われるか、そしてどのような義によって即ちキリストを通して我々が自由にされるといふことを明らかにしたのである⁽⁸⁾」

このスコリエに関して、ヒルシュはこれがルターによるロマ一・一七に関する多くの言及のうちの初めてのものであると指摘している。⁽⁹⁾（この事は後にフォーゲルザンクによっても確認されている。⁽¹⁰⁾）このスコリエにおいては、第一八節の説明の方が第一七節の説明よりも強調されていて、第一七節はほのめかしに留まっていることを認めつつも、ルターがこの文章を書いたとき彼はロマ一・一七によってわれわれが救いと命を持っているということとしてロマ一・一七の神の義を理解していたと主張している。またヒルシュはルターがロマ一・一七についての新しい認識を書き下すだけの勇氣を持つ以前に長い間取り付かれたようにその認識を持ちつづけることができたのだと考えた。ヒルシュは「一般的に言つて、ロマ一・一七に関する発見の本来的な意味は第一回詩篇講義からのみ指摘されうるのであり、その発見は時間的にもつとも近い出来事である⁽¹¹⁾」と述べて、その発見から多くを学ばせられるとしている。以上のような考え方にたつてヒルシュは詩三（三三）の一のスコリエはルターの宗教改革的転回の問題に関して特別な意味合いを持つものであることを主張し、このスコリエはロマ一・一七についての個人的に苦勞して勝ち取った解釈を他人に教えようとする最初の「おずおずとした（schüchtern）試み」なのであると述べている。⁽¹²⁾以上の議論に対してフォーゲルザンクは、ヒルシュが、詩篇三〇篇より前はすべて古い解釈が、また詩篇三一篇より後は新しい解釈が述べられていることを主張しようとしたものであると記している。⁽¹³⁾しかしフォーゲルザンクも詩篇三〇篇以前ではルターはまだ新しい認識を持つていなかったことは明白であると認めてはいるものの、詩篇三一篇より以後は新しい解釈が述べられているとす

るヒルシュの主張は十分に説得力のあるものではないと述べている。⁽¹⁴⁾

以上、ヒルシュによる詩三〇(三三)・一のスコリエの分析を検討した。このスコリエはルターが初めてローマ一・一七に言及した叙述として意義深いものではあるものの、その重点はむしろローマ一・一八の解説におかれていると見られ、また詩三〇(三三)・二の解説の直後に書かれたものであるという観点からも、詩篇三〇(三三)と詩三一(三三)との間に結節点が存在することを認めることには無理があり、従ってこの段階でルターが宗教改革的転回を遂げたと考えるのは困難であると言えよう。

d. 詩篇 七〇(七一)および七一(七二)

この二つの詩篇はフォーゲルザンク⁽¹⁵⁾によって、この段階でルターが「宗教改革的転回」に達したと指摘されているため、本研究上重要なものである。

- (a) 七〇(七一)・一九「あなたの正義は、神よ、高みにまで、大いなることを行なった方よ。

神よ、だれがあなたに類いましょう。」(岩波訳)

フォーゲルザンクはこの詩篇講義のスコリエの中から以下の個所を引用する。

「然し今や全体的に神の義というものは自分自身を深みにまで卑しくすること(humiliare)である。ここに
おいて、最高のしかも最深の卑しめによって神の力であり神の義であるキリストが指し示されているので
ある。」⁽¹⁶⁾

フォーゲルザンクは、このようなキリスト論的な根拠によって神の義であるキリストが指し示されているので、人間はこのようなキリストに倣うことによって神により義とされると考え、この詩篇の段階でルターは「硬い胡桃の殻を完全に粉々にした⁽¹⁷⁾」とし、字義的な意味と、転義的な意味で、キリスト論及び義認論は驚かされる

ような新しい方法で明らかになると説明した。すなわちフォーゲルザンクはこの詩篇の段階でルターが『宗改
革的転回』を遂げたと考えたのであった。しかしながらルターはこの説明において、「全体的に神の義というも
のは自分自身を深みにまで卑しくすることである」とはつきり述べているのであって、これは人間ができる限
りの努力によって自分自身を卑しめれば、神によって義とされると説明しているのであり、これはとりもなお
さず「新しい道」の教理そのものと言わねばならない。さらにルターはこの聖句に関して以下のようにも書いて
いる。

「この聖句において遂に『神の義』と『人間の義』との区別が正確に述べられているのである。すなわち、
『神の義』は天の天にまで登りつめて、私たちにもそこへ届かせようとするものである。それは最高のところ
に到達するような最高の義でさえある。これに対して、『人間の義』というのはそうではなく、むしろ深
底にまで下り下がるものである。何故ならば自分自身を誉めそやす人は卑しくされ、自分自身を卑し
くするものは高められるからである。然し今や全体的に神の義というものは自分自身を深みにまで卑しく
することである。ここにおいて、最高のしかも最深の卑しめによって神の力であり神の義であるキリスト
が指し示されているのである。」⁽¹⁸⁾

すなわち、ここでは『神の義』は天の天にまで登りつめて、私たちにもそこへ届かせようとするもの」と書か
れており、これは「自らの最善を尽くすことによって義とされる」ことすなわち「新しい道」の思想を述べてい
るものと考えられる。また、「人間の義」についてルターは、人間が十戒その他の律法や、この世的な定めを遵
守することと理解していた。上述のスコリエでは「自分自身を誉めそやす人は卑しくされ、自分自身を卑しく
するするものは高められる」と述べ、人間は自らを卑しくすることによって「義」とされることを述べている。

また、然し今や全体的に神の義というものは自分自身を深みにまで卑しきすることである」とも述べている。ここにおいてルターはキリストが、神の身分でありながら、神と等しいものであることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じものになり、人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順（フィリ二・六・八）であつたことを示し、キリストこそ「神の義」と、人間の義とを体現したものであつて、人間の手本であるということを示そうとしたものと考えられる。ここにおいてルターは「神の義」と「人間が自らを卑しきすること」とは同一のことである、すなわち人間が自らを卑しきものすることによって「神の義が得られる」との認識を持っていたことになると考えられる。

(b) 詩七一（七二）・一一「神よ、あなたの公正を王にお与え下さい。あなたの正義を王の子息に。彼が審きますように、あなたの民を義をもつて、あなたの困窮者たちを公正をもつて。」

この聖句のスコリエの中でルターは神の審きについて以下のように説明している。

「神の審きは転義的（tropologicum）なものである。このことは聖書の中で最もしばしば用いられることである。このことは神ご自身が断罪し、われわれがわれわれ自身について持っている人間的な行為を備えた古き人全体の如何なるものでも断罪する原因となるところの審きなのである。これは元来卑しき（humilitas）であり、たしかに卑しきすることである。自分自身を卑しきとみなす人が義しいのではなく、自分自身の目で見て、自分自身を、いまいまいきどい人間だと考える人（そして断罪し自分自身の罪のために償う人）が義しいのである。聖書がこの言葉「審き」を卑しきの真の性質である、自分自身に対する悪口、軽蔑、そして完全な非難を表現するために用いているのは、この特徴的な様相によるのである。これは神の義や力や知恵のように『神の審き』と呼ばれる。『神の審き』というのは、それによって我々が賢く、強く、

正しく、憤み深くされ、それによって審かれることである」。

すなわちルターはここでは「自分自身の目で見て、自分自身をいまいましくひどい人間だと考える人（そして断罪し自分自身の罪のために償う人）が義しい」といつており、人間自身の努力が義のために必要だとしているのである。この点に関しては徳善も、ルターが例えば詩篇九五（九六）・六のスコリエにおいて、「あなた自身にとって無力となりなさい。そうすれば神に対して力ある者となるものとなるであろう。あなた自身にとつて罪人となりなさい。そうすれば神に対して義となる者となるであろう」と言っている点などを捉えて、「humilitas」をもつて自らの義を確立する危険すら感じられる」と指摘している⁽¹⁹⁾。またルターは詩篇

一一一・五のスコリエの中で、「卑しさは従順そのものであり完全な義しさである」⁽²⁰⁾と述べて、

倫理的な考え方をしている。このようにルターは、第一回詩篇講義においては、神の義との関係において採り上げた卑しさ思想の説明の中で、「新しい道」の教理に即した考え方をとっていると考えることができよう。

e. 詩篇一一三（一一四、一一五）・「主よ、われらにではなくあなたの名にこそ、栄光を与えてください」この聖句についての講義の中でルターは、以下のように記している。

「神は我々がこの賜物を受けることが出来るように用意を整える以外に何も要求はしないのである。それはあたかも地上の君や王が、決められた時と場所で王の来るのを待つてさえすれば、一人の泥棒や殺人者に一〇フロリンを約束するようなものである。ここではその王は泥棒に何らかの価値があるからではなく、王自身の自由な約束と憐れみの発露として債務者になろうとしていることが明らかであり、泥棒に何らかの価値がないからといって約束したことを反故にすることも無いのである。それで、それは我々の価値の基礎の上にあるのではなく、憐れみ深い神の純粹な約束の上にある故に、靈的出現もまた恵みによる

のであり、栄光によるのである。このようにして神は靈的出現を約束した。⁽²¹⁾」

さらに、このスコリエにおいては、マタ七・七八の聖句を引用した後、以下のように書いている。

「ここにおいて、教師たちは正しく、自分自身の中にあること (poni se esse) ⁽²²⁾ を行なう人に対して、神は間違いないしに、恩恵を与えようと言うことを言うのである。また、恩恵は比較を超えているので、人間は価値を基礎にした恩恵に対して自分自身を準備できないかもしれないけれども、それでも、神のこの約束と神の憐れみの誓約のゆえに、適合性の基礎の上に自分自身を準備できることになる⁽²³⁾」。

ルターによるこの文章は「新しい道」と関わりのあるものであると考えられる。「新しい道」の考え方によれば、神は自らの最善を尽くした人すなわち *quod in se esse* ⁽²⁴⁾ を実行した人の上には恵みを与えるように神自らに義務を課しているという主張なのである。このような観点から上のルターの文章を分析すると、「我々がこの賜物を受けることが出来るように用意を整えるならば、神は自らを債務者とする」との考え方や、「決められた時と場所ので王の来るのを待つてさえすれば、一人の泥棒や殺人者に一〇〇フローリンを約束する」との譬えは、人間が自分にできることを最大限にしておれば、神は人間に対する恵みを施す義務を負うという「新しい道」の教えに基づいた考え方を説明しているものと見られるのである。このように考えれば、ルターが一五一五年五月下旬に至ってもなお「新しい道」に立脚した考え方に立っていたものと見られ、従って『宗教改革的転回』を遂げていないという事を意味しているといつてよいであろう。

(二) 『ローマの信徒への手紙講義』(一五二五年一月三日、一五二六年九月七日の三〇九日間)

- a. ロマー・一七「福音には神の義が啓示されていますが、それは初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。『正しいものは信仰によって生きる』と書いてある通りです。」

この聖句に関してルターは次のようにグロッセを書いている。

「神の義は、それによってのみ人は救いにふさわしく、それによってのみ義人は神の前にいる、その中に啓示されて、何故なら、以前は隠されていて、自分の行いで成り立つと考えられていたからである。しかし、今や、「啓示される」。信じる人以外には誰も義人ではないのである。マル一六・一六で、『信じて洗礼を受ける人は……』とある通りである。信仰から信仰に至る⁽²⁵⁾。ルターは以前は、「自分の行いで成り立つ義」即ちオッカム主義的な義を考えていたのであった。しかし今やこのグロッセで明らかのように、啓示によって「信じる人以外には誰も義人ではない」ということがはっきりと示されているとしている。ここに行爲義認を否定して信仰義認を主張する宗教改革の思想が現れている。また同じ聖句のスコリエには、

「人間の教えにおいては人間の義、即ち、誰がどのようにして自らと人々の前で義人であり、義人となるか
が示され、教えられる。だが福音においては神の義即ち、誰が、どのようにして神の前で義人であり、義人となるか」が神の言葉を信じる信仰によってのみ啓示される⁽²⁶⁾。」

と書かれている。すなわち、ここでは人間の義と神の義との違いが述べられ、人間の義では人々の前でよい行いをするにより義とされるのに対し、神の義では、神への信仰のみによって義とされることが説明されている。さらにまた「神の義」については、

「神の義こそが救いの原因だからである。ここでもまた、『神の義』は、それによって神ご自身がご自身に

おいて義であるところのものと受け取られるべきではなく、それによって我々が義とされるところのものと受け取られるべきである。このことは福音の信仰によって起る⁽²⁷⁾」

と説明している。この「神の義」の説明こそ正に「神が義である」と言つ事柄が神の能動的な義を指すのではなく、神の受動的義、即ち信仰のみによって人間が一方的に神によって義とされるといふ宗教改革の原理を述べているのである。そしてこのような考え方を彼自身にもたらしした経緯についてルターは一五四五年の『ラテン語全集』の序文の中に以下のように記述している。⁽²⁸⁾

「私は『神の義はその福音の中に啓示された。義人は信仰から生きると書かれている通りである』という言葉のつながりに注意して昼も夜も考えつづけていたが、ついに神は私を憐れんでくださった。その時わたしは神の義を、それによって義人が神の賜物を受けて生きる、すなわち信仰から生きる、というふうに理解し始めた。……このように理解し始めた時、私は全く新しく生まれたように感じた」

さらに、ルターはローマ一・一七のスコリエにおいてアウグスティヌスの『霊と文字』に言及し、以下のように書いている。

「それだから聖アウグスティヌスも『霊と文字』の第十一章で『これが神の義といわれるのは、神がこれを与えることによって義人となさるからである。救いは主のもの（詩三・九）とあるように、それによって主は人々を救うのである』⁽²⁹⁾と言っている。彼は同じ本の第九章でも同じことを言っている」。

すなわち、『霊と文字』の第十一章では、「神が神の側から人間に義を与えて義人となす」と書かれているのに対し、第九章では「それ（神の義）によって神が義しくあるのではなくて、神が不敬虔なものを義とする場合に、神がそれをもって人間を飾り着せたもう」神の義⁽³⁰⁾を言っている」と述べられている。⁽³¹⁾従つて、第十一章の場合

は、「神が不義な人間を神の前で義なるものとする、すなわち義なるものに変える」(カトリックの成義論的な考え方)との思想を含んでいると解釈することもできるが、第九章の場合は、「本質的には義でもない人間をキリストの贖罪と言う衣をかぶせて義とみなしてしまう」との法廷的な解釈もでき、内容的に異質な要素を含んでいると考えることもできるのである。しかしここでルターは、『霊と文字』の第十一章を引用しながら、わざわざ「同じ本の第九章でも同じことを言っている」と付け加えており、『ローマの信徒への手紙』を講義していた段階では、ルターは「神の義」を「人間が神によって義の衣を着せられた状態」と理解し、アウグスティヌス的に神の恩恵によって義とされた状態と考えていたということも考えられる。サアルニヴァーラはこのような観点から、「ルターのローマ人への手紙の講義の中では、義とされることについての考え方はまだ宗教改革前の類型のものである。支配的な面は倫理的なもので、宗教的なものではない。一五一五年と一五一六年の間においてルターは律法と福音を正確に区別する仕方を知らなかった。信仰によって達成される律法の完全履行は義とせられることの条件要素ではないことを理解していなかった。ルターは、義とされる事は恵みによって律法が完全に履行されることを意味していると教えている」と言っている⁽³²⁾。また岸も「彼が『神の義』について理解を深めてきた事は講義を通じて見られるのであるが、もつとも重大な基本線が明確にされていないところから生じる不明瞭さが未だに影を潜めていないのである。それは『律法』と『福音』との間に鋭い線を引くことである」と述べている⁽³³⁾。しかし、たとえルターが『ローマの信徒への手紙』の講義において『霊と文字』の第九章的な理解をしていたとしても、この段階で「新しい道」に基づく神の義の考え方を脱却していた事は確かであり、少なくとも「宗教改革的転回」を遂げていたと言えよう。しかるにルターは一五四五年の『ラテン語全集』の序文の中に以下のように記述している⁽³⁴⁾。

「その後（「塔の体験」後）私はアウグスティヌスの『霊と文字』を読んだ。その中で私は、予想もしなかったことであるが、アウグスティヌス自身も神の義を同じように解釈しているのを、つまり神が私たちを義とする時に、神が私たちに着せる義であると解釈しているのを見出した。この事はこれまでに不完全にしか述べられて来なかつたし、義を帰すことについても彼は完全に明瞭に説明したわけではなかつたとしても、しかしわたしたちが義とされる神の義が教えられている事は喜ばしいことであつた。」

すなわちこの記述によつて、ルターは「宗教改革的転回」すなわち「塔の体験」を経験した後、『霊と文字』を読んで、アウグスティヌスの「神の義」の考え方がそこに教えられているのを発見し、喜ばしいと感じたのであつた。ただしルターはこの場合、『霊と文字』九章の「神が私たちに着せる義」というアウグスティヌスの説明を引用した上で、「義を帰すことについてもアウグスティヌスは完全に説明した訳ではなかつた」との批評を加えている。これは、ローマ一・一七のスコリエにおいて、「神の義」についてのアウグスティヌスの『霊と文字』十一章の説明を行った後、これと「同じ事」として九章の説明も引用している事実と矛盾するようにも考えられる。この問題については次のような時間的経過を推定すれば解決出来るであらう。

一五一三年八月から一五一五年十月の間『第一回詩篇講義』を行った。

『第一回詩篇講義』終了後一五一五年十一月までの間に「塔の体験」により、宗教改革的転回を経験した。その後、『霊と文字』を読み、アウグスティヌスも「神が私たちを義とする時に、神が私たちに着せる義である」と解釈しているのを見出し、アウグスティヌスが神の義をルター自身と同じように解釈していると考えた。

一五一五年十一月以降『ローマの信徒への手紙講義』に取り組み、ローマ一・一七のスコリエで「聖アウ

グステイヌスも『霊と文字』の第十一章で「これが神の義といわれるのは、神がこれを与えることによって義人となさるからである」と言っている。彼は同じ本の第九章でも同じことを言っている」と書いた。その後ルターは、アウグステイヌスの考えが神の恩寵論に基づくものであつて、自らの、イエスキリストを救い主と信じる信仰のみによつて神の側から授けられる義の真理を完全・明瞭に説明したわけではなかつたことに気付いた。すなわちルターはこの段階で、律法と福音との区別を截然と認識し、完全な宗教改革的認識に到達した。

一五四五年にラテン語全集の序文を書いた時には、当然このような宗教改革的認識の上に立つて回想しているので、アウグステイヌスの考えは、「義を帰すことについて完全に説明した訳ではなかつた」との論評を加えたものと考えられる。

ルターはこのスコリエの中でさらに人間の行いによる義と神の義とを区別する為に、アリストテレスに言及して次のように言っている。

「そつといわれるのは、行いによつて生じる人間の義と区別するためである。アリストテレスがその『倫理学』第三巻で明瞭に定めている通りである。彼によれば義は行いに続き、行いから生じる。しかし神によれば、義は行いに先行し行いは義から生じる」⁽³⁵⁾

ルターはアリストテレスに基礎をおくスコラ哲学と神学とを厳密に区別しており、両者を混同するスコラ神学に対しては厳しい対決の姿勢をとっている。一五一七年の『スコラ神学を反駁する討論』⁽³⁶⁾においてはその「テーゼ四一」において、「アリストテレスの倫理学のほぼ全体は恩恵に対して最悪の敵である」と主張し、その理由として

「私たちは義の行為をなすことによって義とされるのではなくて、義人に造られてこそ義の行為をなす。これは哲学者たちの意見に対立するものである」⁽³⁷⁾

と述べている。ただルターも行いが人々の間で大いに認められる場合即ち人間の義に関してならば、行いによる義も尊重されねばならないとしている⁽³⁸⁾。いずれにしても、ルターは神の前には人間は行いによつては義とはされないということを明らかに示しており、その譬えとして、義と行いとの関係について、以下のように記述している。

「聖別され、このために聖とされなければ、司教や司祭の行いを誰もすることが出来ないのと同様である。まだ義で無い人の義の行いは、まだ司祭にもなっていないのに、司祭や司教の行いをする人々と同様であつて愚かで、たわむれのものであり、市場を走り回る人々と同様である」⁽³⁹⁾

この義と行いについての考え方は後の『ガラテヤ大講解』と一致するものであり、この点からみればローマ一・一七の段階で「宗教改革的転回」に達していたものと考えられよう。

b. ロマ三・二八「私たちは人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです」この聖句に対するスコリエにおいてルターは以下のように述べている。

「われわれは律法の行いなしに義とされると言つ時には、義認の後で求められるべき行いについて語っているのではない。何故なら、これは最早律法の行いではなく、恵みと信仰の行いだからである。……パウロが律法の行いと言っているのは、これを行なう人が、これを義認の原因と考え、これを行なつたがゆえに自分が義であると考えるようなものである。それだから、彼らは義認を求める為にこれらの行いをするのではなくて、得られた義を誇る為にするのである。それだから、行いをしてしまうと、律法は既に完全に

成就されたとして、他に義認などはないかのごとくに立ち止まってしまつ。疑いもなくこれは傲慢で、誇り高ぶる態度である。いや、律法の行いが律法を成就するということこそが誤りなのである」⁽⁴⁰⁾

このスコリエでルターが「ここに言う行いは義認の後で求められるべき行いのことではない。何故なら、これは最早律法の行いではなく、恵みと信仰の行いだからである」と語っているのは、信仰によって義とされたものが行う行いは救いという恵みを受けたものが行なう当然の行いの説明であり、さらに律法の行いによつては義とされないことの説明である。一五三五年に出版された『ガラテヤ大講解』においてルターは、

「キリストを信仰によつて把握したのだから、今度は人々は出て行つて、神と隣人を愛さなくてはならない。神を呼び求め、感謝し、説教し、賛美し、神に告白し、隣人によいことをし、仕え、自らの務めを果たすがよい。これこそ真によい行いであつて、心に受けた信仰と喜びから溢れ出るものである。何故ならわれわれはキリストにより罪の許しを無代価で持っているからである」⁽⁴¹⁾。

と述べ、キリストを信仰をもつて把握したものが喜びをもつて良き行いをなすのは当然であると教えている。『ガラテヤ大講解』はルターの信仰義認論の基盤と考えられているが、ロマ三・二八のスコリエにおいて述べられた信仰と行いの関係はこの『ガラテヤ大講解』の主張と軌を一にするものであるから、このことから見ても、ルターが、ロマ三・二八の段階では「宗教改革的転回」に達していたものと考えられよう。

c. 『第一回詩篇講義』と『ローマの信徒への手紙講義』の「卑しさ」の対比について。

ここで、『ローマの信徒への手紙講義』の中に説かれている「卑しさ」についてのルターの考え方を数例挙げれば以下のようになる。まず、ローマ一・一のスコリエにおいては、

「人々の前で知恵あり、義であり、善くある人であつても、特にもし彼が自分自身でそう思っているのなら

ばなおさら、神の前ではそのようなものとして認められないであろう。それ故、これらすべてのものにおいて、人は、あたかも未だ何も持たないかのよう⁽⁴²⁾に、自らを「卑しさ」のうちに保ち、我々を義と認めてくださる神の裸の憐れみを期待すべきである」

と述べ、自らの「卑しさ」を主張するのではなく、神の憐れみを期待すべきことを説いている。次に、ロマ二・十一のスコリエには、

「隣人こそ我々に対して優れているものたらしめよう。見よ、このようにして我々は神に対しても、人に対しても完全な卑しさ、すなわち、完全な、完成された義を果たすことになるであろう。聖書全体は卑しさ以外の何を教えているであろうか。この卑しさをもってわれわれは神にばかりで無く、全被造物にも服するのである」⁽⁴³⁾。

と書いて、聖書全体の教えは基本的には卑しさの教えであることを説明している。これは、イエス・キリストが父なる神の前で取られた卑しさに見倣う事こそ神の導きに従うことであることを教えていると考えられる。また、ロマ二・二二のスコリエには、

「使徒と、その主の務めはすべて、傲慢なものを卑しくし、自分たちの状態の認識に導き、彼らが恵みを必要とすることを教え、彼ら自身の義を打ち壊して、彼らが卑しくされたものとしてキリストを求め、自分が罪人であることを告白し、恵みを受け、救われるようにすることである」⁽⁴⁴⁾。

と書かれており、人間は神の恵みによって自らを正しいとする傲慢さを打ち砕かれ、卑しくされてキリストを求めるべきことが教えられている。さらにロマ三・二二のスコリエでは

「この卑しさを知らず、信仰のこのような徹底を理解せず、自分こそ信じており、すべての信仰を完全に所

有していると考ええる傲慢なものは主の声を聞くことが出来ず、これは誤っているとしてみれば逆らう⁽⁴⁵⁾。」と述べ、信仰的な立場からおのれを虚しくすべきことを説いている。

『第一回詩篇講義』の詩七一（七二）・二のスコリエにおいては、上述のように人間が自ら自分の目で見て、自らを卑しいものと見なすべきことを説いていた。この考え方は、唯名論に基づく「新しい道」の神の義に則したものと考えられたが、『ローマの信徒への手紙講義』の中での上に挙げたような「卑しさ」についての考え方は、宗教改革の原理である「信仰のみ」に根ざしたものであると見られる。従ってこのような「卑しきhumilitas」についてのルターの教説の変化からも、『ローマの信徒への手紙講義』即ち一五五一年十一月の段階では、ルターが宗教改革的転回を遂げていたと考えられるであろう。

結 論

本論文では、ルターの宗教改革的転回について、従来この主題について行なわれた研究状況の一端を表の形で纏め、次に『第一回詩篇講義』（一五二一―一五）と『ローマの信徒への手紙講義』（一五二五―一六）の数篇ないし数章についての分析を行ってこれに基づいて筆者の見解を述べた。

ヒルシュ（詩篇三一（三二））やフォーゲルザンク（詩篇七〇（七一）―七一（七二））らは、『第一回詩篇講義』の期間内にルターの宗教改革的転回が起こっていると主張している。確かにルターは特に詩篇七〇（七一）―七一（七二）のスコリエにおいて神の義と人間の義について入念な解説を行い、卑しき(humilitas)との関係についての深い教理を展開しているのである。しかしながら、この段階での卑しさについての教理は、人間が自

らの立場で主張する卑しさであつて、一五一五年に著述した『ローマの信徒への手紙講義』の中に見られる教理、すなわち、神の側から与えられる卑しさの教理には及んでいなかったものと考えられる。筆者の分析によれば、ルターは『第一回詩篇講義』の段階では、オツカム主義に根ざした「新しい道」の神の義の教理から脱却しきれていなかったと考えられるのである。ところが、一五一五年から一五一六年にかけて行なわれた『ローマの信徒への手紙講義』の解説においては、「神の義」について「神の義こそが救いの原因だからである。ここでもまた、『神の義』は、それによって神ご自身がご自身において義であるところのものと受け取られるべきではなく、『神の義』は、それによって我々が義とされるところのものと受け取られるべきである。このことは福音の信仰によつて起こる」と述べている。この「神の義」の説明こそ正に「神が義である」と言う事柄が神の能動的な義を指すのではなく、神の受動的義、即ち信仰のみによつて人間が一方的に神によつて義とされると言う宗教改革の原理を述べている。また「卑しさ」についての『第一回詩篇講義』と『ローマの信徒への手紙講義』における教説の変化から見ても、ルターの「宗教改革的転回」すなわち「塔の体験」は、『第一回詩篇講義』の講義を終えた一五一五年十月から『ローマの信徒への講義』を始めた一五一五年十一月の間に生じたことであると考へて良いであらう。

(別表) 宗教改革的転回に関する従来の研究

(1) ドイツ及びスイス

| 著 者 | 発表年 | 発見の時期 |
|-------------|------|-----------------------|
| H. デニフレ | 1904 | 1515 |
| K. ベンラス | 1905 | エルフルト時代 |
| H. ベーマー | 1906 | ヴィッテンベルク時代 |
| H. グリーザル | 1911 | 1518 或いは 1519 始 |
| E. ヒルシュ | 1920 | 1513 |
| K. ホル | 1921 | 1511 夏 ~ 1513 春 |
| E. シュトラケ | 1926 | 1515 イースター前 |
| K. フォーゲルザンク | 1929 | 1514 秋 |
| E. ビツアー | 1958 | 1518 |
| H. ボルンカム | 1961 | 1514 |
| K. アーラント | 1965 | 1518、2 月 ~ 3 月 |
| O.H. ベッシュ | 1966 | 転回 : 1514、塔の体験 : 1518 |
| B. ローゼ | 1968 | (研究論文集上巻) |
| M. クレーガ | 1968 | 1517 年以降 |
| O. モダルスリ | 1968 | 1515 |
| R. シェ・ファ | 1969 | 第 1 回詩篇講義の時 |
| O. バイヤー | 1969 | 1518 |
| M. プレヒト | 1977 | 1518 春 |
| M. プレヒト | 1980 | 1518 春 ~ 秋 |
| K. アーラント | 1983 | |
| J. メルハウゼン | 1985 | |
| R. シュヴァルツ | 1986 | 1518 |
| R. シュターツ | 1987 | 1518 ~ 19 の冬 |
| B. ローゼ | 1988 | (研究論文集下巻) |

(2) フィンランドにおける研究

| 著 者 | 発表年 | 発見の時期 |
|----------|---------------------|-------|
| サアルニヴァーラ | 1951 (English) | 1518 |

(3) イギリスにおける研究

| 著 者 | 発表年 | 発見の時期 |
|--------|------|-------|
| マックグラス | 1985 | 1515 |

(4) フランスにおける研究

| 著 者 | 発表年 | 発見の時期 |
|-------|------|---------------------|
| ストロール | 1953 | 1512.10 と 1513.7 の間 |

(5) アメリカにおける研究

| 著 者 | 発表年 | 発見の時期 |
|------------|------|---------|
| R. ペイントン | 1950 | 1515 年内 |
| E. エリクソン | 1958 | 確定は不可能 |
| B.A. ゲリッシュ | 1982 | 1515 年内 |
| J.M. キッテル | 1986 | 1514 秋 |

(6) 日本における研究

| 著 者 | 発表年 | 発見の時期 |
|------|------|-------------------|
| 北森嘉蔵 | 1960 | 1512 秋と 1513、7 の間 |
| 松田智雄 | 1961 | 1512 秋と 1513 夏の間 |
| 石原 謙 | 1972 | 1513 頃、断定不可能 |
| 今井 晋 | 1982 | 確定は困難 |
| 金子晴勇 | 1985 | 1513 ~ 15 |
| 徳善義和 | 1996 | 1514 秋、完成期は 1518 |
| 倉松 功 | 1998 | 1514 |

注

- (1) WA3.66.5-9
- (2) WA54.185.23
- (3) WA5.144.1-8. 竹原龍一訳『キリスト教神秘主義』11・教文館 二〇〇一 三三三頁
- (4) クレイバーン版 WA55-146より WA55 Ⅱの第1回討論講義のページ数から比例計算で求めた推定値
- (5) 1611-1612年 北森も指摘している。北森『宗教改革の神学』昭和三十五年一一頁
- (6) WA3.163.14-17
- (7) Emanuel Hirsch, "Initium Theologiae Lutheri", (B.Lohse, "Der Durchbruch der Reformatorischen Erkenntnis bei Luther", Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1968) S.82
- (8) WA3.174.13-20
- (9) Hirsch(B.Lohse68)S.85.9 86.3
- (10) E.Vogelsang, "Die Anfänge von Luthers Christologie nach der ersten Psalmen Vorlesung" Berlin und Leipzig 1929 Verlag von Walter de Gruyter & Co.S.40
- (11) Hirsch(B.Lohse68)S.80.17-20
- (12) Hirsch(B.Lohse68)S.87.1 3
- (13) Vogelsang, p.40.27-41.4
- (14) Vogelsang, p.41.4-41.9
- (15) Vogelsang, p.49 24
- (16) WA55-II.432.210 213 = WA3.458.4-7
- (17) Vogelsang, p.40.12~ 14
- (18) WA55 II.432.205-214 = WA3.457.38 458.7' LW10.401.33-402.6
- (19) 徳善義和「ルター・第1回討論講義における fides と humilitas」『徳善義 No.3』

日本ルーテル神学大学 聖文舎 一九六七 六四、七六頁

- (20) WA4.406.5
- (21) WA4.261.32-39: LW11.396.11-20
- (22) Thomas v. Aquino (1225-1274) Summa theologiae, II, 1. quæst. 112 art.3. Gabriel Biel Sermones de festivitatibus Christi Serm. 14
Velgl.Pitt, Einleitung in die Augustina. II. Erlangen 1868 S.24,26
- (23) WA4.262.2-7. LW11.396.22
- (24) McGrath, "Luther's Theology of the Cross" p.89
- (25) WA56.10. 著作集2.8.12.17-14.3
- (26) WA56.171-172.3. 著作集2.8.232.13-233.1
- (27) WA56.172.3-5. 著作集2.8.233.1-4
- (28) WA54.186.3-8. 竹原創一訳
- (29) WA56.172.5-8. 著作集2.8.233.4-7
- (30) 『アウグスティヌス著作集』 9、金子晴勇訳 一九七九 三二―三三頁
- (31) 『マウグステイヌス著作集』 9、金子晴勇訳 一九七九 三八頁
- (32) U.Saarnivaara, "Luther Discovers the Gospel" Concordia Publishing House Saint Louis, 1943, p.86
- (33) 岸千年編訳『ルターの説教』ルター選集・2 聖文舎 一六八頁
- (34) WA54.186.16 20. 竹原創一訳
- (35) WA56.172.8-11. 著作集2.8.233.7-9
- (36) WA1.226.10. LW31.12.4-5
- (37) WA1.226.8. LW31.12.1-3
- (38) WA56.417. LW10.409.3-5
- (39) WA56.172.11-15. 著作集2.8.233.9-12

- (40) WA56.264. 著作集 2.8.377.16-378.7
- (41) WA40.234. 著作集 2.11.200.7 11
- (42) WA56.159. 著作集 2.8.214.16 215.3
- (43) WA56.199. 著作集 2.8.274.17 275 3
- (44) WA56.207. 著作集 2.8.287.9 11
- (45) WA56.253. 著作集 2.8.359.1 2